

「サハリンはおもしろいぞ。一緒に行こうぜ」

北海道に住む長岡から突然の誘いがあったのは、残暑がようやく一息ついた九月下旬のことだった。

彼の提案はいつも唐突だ。数年に一度だが、「東京に出張する。夜、空いていたら飲もう」という連絡があるのも、いつも二日か三日前である。そのたびに予定をやりくりするのに面倒な思いをする。しかし、この調子で長らく付き合ってきた。

「それは樺太のことだろう。そんなに意気込んで、何がおもしろいのかね」

曾根一郎はあえて、とぼけた調子をよそおって電話口で言った。障子の外の小さな庭で、武蔵野の雑木林から飛来した法師蟬が一匹、命ある日を惜しむかのように鳴いている。

実はサハリンと聞いただけで、曾根の気持ちの中に大きく揺らぐものが生じていた。だが、その理由を長岡に説明するには時間を要する。そこには触れずに彼の説明に耳を傾けた。

「そりゃあ、おもしろいに決まっているさ。間宮林蔵や最上徳内が探検に行って、日本列島の北



端だと考えたところだ。この前の戦争に関連して暗い話も多く残っているが、日本とはこれから縁が深くなるところだ。第一、君、でかいアンモナイトの化石がごろごろしているし、トドたちが氷に乗って旅人に挨拶するって言うぜ。おもしろいだろう」

都立高校の同級生でバスケット部の仲間だった長岡は、大学受験の際、父親の出身地の北海道の学校を選び、卒業後にそのまま住みついた。そして、四十年にわたるサラリーマン生活は、道内ばかりを転動しているうちに定年を迎えた。

「そもそも、何でいまサハリンなんだい。トドと言ったって、まさか氷に乗って空港で出迎えているわけじゃないだろう。野生動物を撮影するのが目的なのかね」

曾根がたずねると、長岡は「いや何、ちょっと事情があってね」と言うだけだ。

「だいたい君は会社を辞めてから、いま何をやって日々を過ごしているのかね」と曾根は重ねて聞いた。ようやく会話が落ち着いてきて、唐突な勧誘の背景もおぼろげながら分りかけてきた。

大学で土木工学を学んだ長岡は、卒業後に地元の建設会社に就職した。定年後に傘下の会社に移り、役員の職を無難にこなしたらしい。この四月にフリーになったことは、紋切り型の挨拶状で知っていた。土木技術にかかわる仕事をしているものとはばかり思っていたが、実際には総務系の職場を中心に歩き、時には国政選挙の候補者のバックアップまで仕事の範疇に入っていたとい

う。親しい間柄だが、何をやっているのかよく分からないところが、いつも彼にはある。

とにかく長岡はいまや老境に入り、一人息子は無事に就職・結婚して、孫もいるという。それで彼が何を始めたかと言えば、まず大学の同窓生を中心とする俳句サークルに入った。公営プールでの水泳にも通う。さらに何を思ったか、「オレには物書きの才があるという人もいるので、挑戦してみることにした」と言い、旅のペンクラブと称する団体に入会した。

それでどのような文章を書いたのかは、まだ見たことがないので分からない。旅先から来る絵葉書によると、国内だけでなく北欧諸国にも足を延ばし、自分の撮った写真にエッセーをつけては、小さな雑誌に原稿を寄せているらしい。

「東京に住んでいる君には分からないかもしれないけれど、北海道では千島やサハリンに特別な思いを抱き続けている人が多いのだ。旅のペンクラブのメンバーの中には何度も北方領土を眺めに行く人がいる」

そんな流れの中で来年の五月、鉄道と高山植物を見るサハリン旅行がクラブ内で発案されたらしい。かねてからサハリンに特別な思いを抱いていた長岡は、その企画幹事に名乗りをあげた。北方の自然風景をカメラにおさめ、自分の旅のエッセーに新境地を開きたいらしい。

問題はここからだ。ペンクラブは下調べのために先遣隊を出すことになり、長岡は当然のよう

にチーム入りを志願した。しかし、渡航の手続きに面倒くさいところがあり、現地で調達するバスや案内人の都合によって、十一月下旬にならないと下見ツアーの受け入れが難しいということになった。この時期のサハリンの気候は荒れるらしい。それで一人、二人と希望者が撤退し始めたという。

この下見プランを成就するためには、最低催行人数というものが示されており、このままでは成立が難しいという意味のことを旅行会社に言われた。そこで、人数確保のために曾根が誘われたという次第だった。

「それじゃあ旅行会社に踊らされているようなものじゃないか。僕はそのクラブの員数合わせかね。穴埋めか当て馬のような感じだな」

曾根は不快感をよそおって言った。しかし、実はもう心の中をサハリンが占めている。かねてから一度は行きたいと思っていたが、一人で出かけるには重苦しい事情もある。このような団体旅行に誘われる機会を待っていたとも言える。同行者が少なくなつた方が、うるさくなくて良いとすら思う。しかし、ここは一種の交渉の場面でもあるので、しぶしぶ付き合つてやるというポーズを取っておきたかった。

「安くするんだろうな。君と違ってこっちは三年前から年金暮らしだ。サラリーマン時代のよう

な余裕はないぞ」

「それは心配ないよ。われわれは旅行作家の集まりということになっている。だから、特別に安い料金で受け入れると、現地のツアーガイドも約束している。当て馬というけどね、そういうつもりじゃないよ。まあ、そういう側面が少しはあるが、本質的な問題ではないね。とにかくチャンスなんだ。おもしろいことは間違いないぜ」

定員を満たすために、知人を何人か誘わねばならないというノルマを引き受けているのではなからうか、と疑いたくもなる。だが、彼の最後の一言で、曾根は「分かったよ、行くよ。書類を送ってくれ」と言わざるを得なかった。

長岡はこう言ったのだ。

「もう辞めたとはいえ、君は元新聞記者じゃないか。これはジャーナリストの残日録にとって損のない話だと思うね。実はうちのペンクラブにもそう言っており、すでに君の参加を承諾してもらっているんだ」

長岡は電話を切った。強引なのに、いつも何か爽やかな印象を残すから不思議な男である。

受話器を置いたあと、曾根は本棚から世界地図帳を抜き出して頁を繰り始めていた。意外なことに、「ロシア」の名で区分された数頁分にサハリン州の拡大図が載っていないかった。「日本周

辺」という見開きの千二百万分の一の図を開いて、ようやく「樺太（サハリン）」を見つけることができた。

いくつかの都市の名が細長い島の図上に記されている。その南側に下がると、「宗谷海峡」の文字の上に赤い太線が引かれ、国境を示している。同じ赤い線が択捉海峡にも短く描かれ、さらにサハリン中央部の北緯五十度の線上にもあった。

曽根はことのついでだと思つて、かなり厚手の日本地図帳も開いてみた。見開き二頁の「北海道北部図」の一番左上に礼文島があり、その上端に赤い三つの点でスコトン岬が描かれている。その上方は黒い罫線によって遮られており、さらに北のサハリンまでは載っていないかった。

彼は一息つきながら、自分の記憶をまさぐった。三十代の頃だったが、勤務先の新聞社の図書室から持ち出したロシア語のサハリンの地図と、北太平洋の航空管制図を机上に広げ、何時間も見つめていたことがあった。

それは結果としては空しい努力であり、何の成果にもつながらなかった。当時の状況を思い出すと、苦々しさがよみがえってくる。

「やはり、ここには行かなければならないな」

彼は地図帳を閉じながら、書斎の外の景色を眺めた。法師蟬は庭の立ち木から去り、住宅街の

遠くで鳴いている。しつこい暑気はまだ、空の底に滞り続けていた。

曾根はこの八月で六十五歳になった。老齢年金が増額されて喜んだのは束の間であり、プラス分はそっくり妻の取り分になった。

それまで十数年間、娯楽にしてきた競馬は原則禁止だ。趣味のテニスは続けているが、もう上達は見込めない。近所の友に勧められるままに老人連の俳句会に入り、合唱団にも加わった。さらに市民農園を借り、週一度のノルマのように菜類を栽培し続けている。いずれも自分に向いているとは思えず、いつまで続くか分からない。

三十五年間勤めた新聞社を定年退職したのは五年前で、その関連の印刷会社の事務に行くように人事部から勧められたが、その気にはなれなかった。元々、会社はあまり好きではない。在職中に大きな仕事をしたわけではなく、新聞記者といっても政局や事件・事故の裏話とも縁が遠かった。

思えば、いつも自分が本流にはいないことを意識していた。五十五歳以降は窓際族として調査部門の席をあたためた。しかし、そうした境遇にも不満を持つことはなかった。大学生の時、文学部の考古学教室に七年間もおり、就職口がなくてぶらぶらしていたところを親戚のコネで新聞社の図書館勤務を紹介してもらった経緯がある。いつも「文句を言えた立場ではない」と自分に

言い聞かせながら勤務した。

彼が勤める新聞社は皇居に近い大手町にあった。図書資料部に五年いたあと校閲部に回り、新聞紙面の字句を修正する仕事に精を出した。いつも深夜まで働いた。しかし、シフト勤務だったので休日はふんだんにあり、家族サービスも程々に行った。サラリーマン泣かせの転勤も、一時的に地方記者になった四十代後半に山形県に一度行かされただけだ。子供が高校生と中学生だったために単身赴任を強いられたが、ぶらぶらしているうちにノルマの二年間が過ぎた。地方の生活が単調だった分だけ貯金が増えたくらいで、何事も起こらなかった。

同じ社にいる新聞記者たちから、小さい子供の運動会や学芸会に行けずに恨まれたという話をよく聞いたが、彼はそのような不自由を感じたことはない。二人の男児は父親の仕事に大した関心も示さず、いつの間にかたくましく育ち、家を出ていった。妻は家事も教育も無難にこなし、いまは自分の研究分野である児童心理学とカウンセリングに熱中している。

改めて自分のサラリーマン生活を振り返れば、特段、懸命に働いたというわけでもなく、どちらかと言えば安くはない給料をもらい続け、中古の家も買ったし、酒も好きだけ飲んだ。短期間ではあったが、気に入った女のいるバーに通ったことすらある。そして、いつの日にか仕事を怠ける術を心得てサラリーマン生活を終えたのだ。



ジャーナリストであると思つて胸を張ったことはない。マスコミ産業の末端にいて、その空気を吸いながら生きたが、どちらかと言えば傍観者として終始した。

だが、一度だけ背筋を伸ばし、寝食を忘れて駆け回った時期があった。それは「大韓航空機墜事件」と呼ばれる、謎に満ちた出来事の取材の日々だった。今思い返しても、きわめて腹立たしく、やり場のない怒りを覚える。

単に未解明という言葉ではおさまらないものが、この事件の背後にはあった。政治の壁が民間航空機の犠牲者と遺族をないがしろにして、いまだに全容の解明への努力を閉ざしているのだった。

その頃、曾根は結婚した直後で板橋の社宅に住んでいた。まだ大学院生だった妻との間には長男も生まれていなかった。入社八年目にして取材部門の体験研修に向かう機会が回ってきた。そして、たまたまの巡り合わせで担当したのが、大韓航空機墜事件だった。

当時、一連の報道を通じて、自分の体の中に怒りがあふれることを覚えた。その気分突き動かされるようにして日々を刻んだ。研修とはいえ、徹夜で仕事をするのも何とも思わなかった。それは自分の一生の中でも不思議な時期だったと、今にして思う。

あとがき

五十歳を過ぎて新聞社の定年退職が見え始めた頃から小説を書き始め、時には虚構を設けてその中で考えるという作業に没頭するようになった。山形支局に勤務していた頃に地元の文芸誌の仲間に入れてもらったことが、断続的に作品を発表させていただく契機となり、現在まで続いている。

表題作の「埋もれた波濤」は山形文学107集に発表したもの。一九八三年九月に起きた大韓航空機墜撃事件の際、私は社会部記者の一年生で羽田空港の担当だった。発生時の取材やその後の遺族会とのお付き合いなどの記憶を遡りながら書いた。民間機の撃墜という未曾有の痛ましい事件の全容はいまだに解明されないままであり、私たちが何を知らされてきたのかを考えると、腹立たしさが募るばかりだ。いつかは書かねばならないと思ってきた素材である。小説という曖昧な形ではあるが、ようやく長年の宿題を果たしたつもりでいる。

「鳩憑」は山形文学第81集にペンネームで発表した作品を加筆修正した。モデルは実際に鳩と闘った友人。人間の仕業によって野生を失った動物が、復讐めく生態となって現れる。その巡り

あわせを素材にしている。これを書くことにより、人生のわずらわしきものと自分との距離をどのように設定すべきかを考えようとした。

「地図の中に吹く風」は同86集に掲載したままの形で収録したが、登場人物の姓が他の作品と重複するため、その部分を変えた。定年退職が近付いた男の目的喪失の虚無感を描いてみたかったが、当時の自分の心境を反映していると言えなくもない。

「迷鳥」は同106集に発表。日本野鳥の会の創設者である中西悟堂（昭和五十九年没）の年譜の空白部分を想像で補いながら、彼の青春の彷徨の意味を考えてみたかった。もちろんそれは自分自身の問題でもあるからだが……。私小説とも紀行文とも思える奇妙な作品になったが、自分としては懸案を片付けた思いでいる。中西悟堂は晩年、最後の仕事として天台で培った仏法を通して悟堂哲学を確立したいと言っていたが、病に勝てずに成し遂げられなかったという。雑誌の抜刷をお送りした際、長女ハルノさんからお手紙をいただいた。そこには「父の根本の精神は私にはわかりしれないものがございました。（略）一度も会えなかった母を慕い続ける気持ちもあつたかと思えます」と書かれていた。

この書を、敬愛する故尾崎一雄先生に捧げることにする。昭和四十一年夏から五十八年三月に亡くなられるまで親しくお付き合ひいただき、自然と人と文学とのかかわりについて多くを学ば

せていただいた。ある時、下曾我のお宅で面談中に、「小説家になろうとか文芸評論を仕事にするとか思わない方がいい。新聞記者向きかな」と言われたのを覚えている。『尾崎一雄全集（第12巻）』（筑摩書房、一九八四年）月報に追悼文「石斧の思い出」を書かせていただいた。あの世でこの本を手にとられ、にこにこ笑いながら面白がって読んでくださるのではないかと思う。

第一小説集ということで、装画と挿絵を画家・森潮氏にお願いした。学生時代に俳句の手ほどきを受けた森澄雄先生（平成二十二年没）のご長男で俳誌『杉』主宰を引き継がれている。編集ご多忙の中、昔からの不良の友の無理を聞いてくださり申し訳なく思う。

題字は、酒友の「禅」代表・石塚静夫氏にお願いした。彼の自由な発想と、臨機応変の多様な書が好きであるが、大韓機撃墜事件の記憶を込めた字にするのに苦勞してくれたらしい。ありがとう。

つたない作品の発表のたびに励ましてくださった山形文学の仲間と、単行本として出版を引き受けてくださった論創社の森下紀夫さんはじめスタッフの皆さんに感謝します。

二〇一八年七月

滑志田隆



❖ 著者略歴

滑志田隆（なめしだ・たかし）

一九五一年神奈川県藤沢市生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。一九七八～二〇〇八年、毎日新聞記者。〇八～一〇年、統計数理研究所客員研究員、一〇～一五年、森林総合研究所監事。一五～一八年内閣府、農林水産省、国土緑化推進機構各委員。（現）森林総研フェロー。日本山岳会、日本野鳥の会、山形文学会、日本記者クラブに所属。俳誌『杉』『西北の森』同人。

◆ 筆者メールアドレス [nameshida@h2.dion.ne.jp](mailto:nameshida@h2.dion.ne.jp)

二〇一八年九月一三日 初版第一刷印刷  
二〇一八年九月一九日 初版第一刷発行

著 者 滑志田 隆

発 行 者 森下紀夫  
発 行 所 論創社

〒一〇一—〇〇五一

東京都千代田区神田神保町二—二三 北井ビル

電 話 〇三—三二六四—五二五四

F A X 〇三—三二六四—五二二三

web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 〇〇一六〇—一—一五五二六六

## 埋もれた波濤

装画・挿絵 森潮

題 字 石塚静夫

装幀・組版 永井佳乃

印刷・製本 中央精版印刷

©NAMESHIDA Takashi 2018 Printed in Japan.

ISBN978-4-8460-1735-4

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。